



TITLE:

編輯室より

AUTHOR(S):

CITATION:

編輯室より. 天界 1942, 22(252): 206-206

ISSUE DATE:

1942-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168375>

RIGHT:

私はあの現象がオロロラであると言う事を意識しては居りませんでした。

いづれに致しましても、今までに見た事のない光芒であり、その幽遠な、むしろ崇敬の念さへも感じました。壯嚴なものでありました。

そして、太陽の光線、或ひはあらゆる人工光線の、動的なのに對して、あくまで靜的なものでした。三條の光芒の、上のは40度位の高さでした。然し、オロラの光芒は縦線がほとんど之を占めて居ると聞いて居りますが、果してそれが眞實と致しますと、少し怪しいものになつて來ます。

私も天文と言う事にはほとんど知識を欠いて居りますので、専門的な事はわからないのです。

只、私の兄夫婦が、學校の教師を致して居りますので、何かにつけ文字と言ふものに近づき易く、それで、色々の書籍も見聞致して居るわけで御座います。之を機會に貴會に入會して、天文學の初歩なりとも會得したいとは思つて居ります。(中略)

よく晴れた夜空を眺めて、其の幽遠無限を考える時、しばし此の腦裏に刻み込まれた暗い影も消えてなくなります。宇宙の無限大を思ひ、我がこの地上を見ます時、あまりにもあくせくと、はしない時の流の一つの小さな泡の如き存在であり、そして忽然として現れ、忽然として消ゆる無數の泡沫、之が各自の生命かと思ふと、一種のはかなさを感じます。然しながら此の社會に生存して居る以上、働かなければなりません。社會はあらゆる悲喜劇を生んで居ります。人間の生存を拒む事があります。拒まれる其の人が弱いのかも知れません。社會はそんな人に却つて、強い試練を與えて居るのかも知れません。然し、こうした苦境を切抜ける人は幾人でしょう。私もこの試練の前に立ち、如何にして通り抜くべきかを考えて居ります。あてのない前途を考えて居ります。

五・九

富山縣三日市 板澤清次郎

編輯室より

少し早いけれど、來年の北海道の日蝕の解説文と其の地圖を載せることにした。多くの會員の待望のものであると信ずるからである。時局は、大東亞の戰爭となつて了つて、歐米各國と我が國との交通は全く絶えた。我々天文關係者に、1943年以後の天文曆が、今だに手に入らない。従つて、村上翁が計算された此の日蝕圖は、時局下、非常に大切なものであること、言ふまでもない。今から、此等の地圖をたよりにして、北海道の地勢を研究して貰ひたい。▲田上天文臺も落成した。純日本式の外觀を呈する建築にて、回轉するドームは、古今東西に無比のものである。來る五月24日の總會に、奮つて參會されたい。只、ひたすらに、其の日の天氣の良からんことを希望する。(編輯子)